柏崎常盤高等学校図書館　令和５年９月号

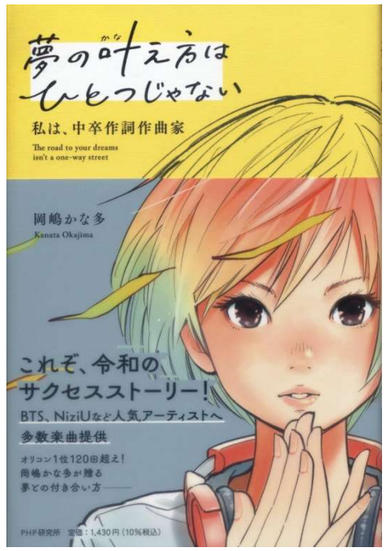
# 図書館だより

令和５年９月１２日発行

## 新着図書の紹介

### ●『夢の叶え方はひとつじゃない　私は、中卒作詞作曲家』

**岡嶋 かな多/著　　ＰＨＰ研究所**



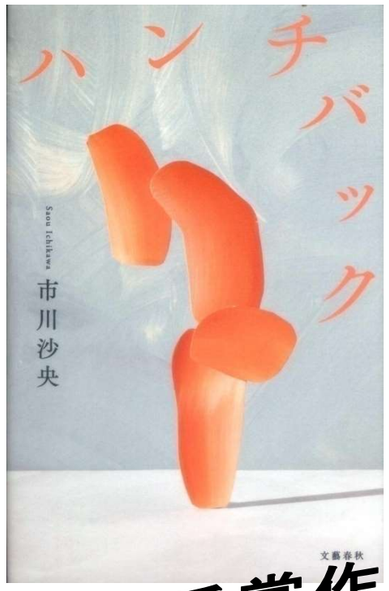

著者は作詞作曲家、音楽プロデューサーとしてＢＴＳ、ＴＷＩＣＥ、ＮｉｚｉＵなど通算 500 曲以上の作品の制作に参加、提供をしている。様々な賞も受賞し、その経歴は輝かしいばかりだ。

彼女はもともとシンガーソングライターを目指していた。「音楽をやるのに化学の知識はいらない」と中学卒業後、音楽スクールに入る。そこには同い年の人は一人もおらず、歌の上手い人はゴロゴロいた。中華料理店のダクトの下で塩おにぎりを食べ、ピアノに突っ伏して泣く日々。バンドを組んでボーカリストとしても活動してみた。しかし、結果は出なかった。挑戦、挫折、挑戦、挫折…の繰り返し。

そんな彼女がどうやって世界で活躍するアーティストになったのか。そこには、彼女のように有名にならなくても、「平凡に生きたい」と願う人にこそ読んで欲しい示唆が詰まっている。夢がある人も、まだ見つかっていない人も一度手に取ってみて欲しい。

**ノンフィクション**

### ●『ハンチバック』　　市川 沙央/著　　文藝春秋




重度障害者である中年女性の主人公は、裕福な両親が遺したグループホームの一室に住み、某有名私大の通信課程に通い、コタツ記事を書いては収入の全額を寄付し、18 禁ＴＬ（ティーンズラブ）小説をサイトに投稿し、零細アカウントで「生まれ変わったら高級娼婦になりたい」とか「妊娠と中絶をしてみたい」などと呟いている。

ある日、ヘルパーの田中がそのアカウントを知っていたことがわかる。

**第 169 回芥川賞受賞作。**著者は障害のために紙の本を読むのが困難だ。電子書籍を頑なに拒否する某有名作家に手紙を書いて、電子書籍化を懇願したが、無視されたという。20 年も前から小説を書き続け、応募しては落選し続けて、今年の文学界新人賞を本作で受賞し、デビューした。重い内容だが文体は軽く、爽快感さえ感じる。おもしろい！深い！教科書に載せて欲しい！93 ページですぐ読める！

**司書のおすすめ！**

**芥川賞受賞作**

### ●『ガラスの海を渡る舟』　　寺地 はるな/著　　ＰＨＰ研究所

羽衣子には５歳年上の兄がいる。彼はいわゆる「発達障害」と思われる特性を持っていた。父と母はそのことでよく言い争っていて、父は家を出ていく。彼女は、父が家を出たのは兄のせいだと思い込んで兄を恨んでいた。

羽衣子が専門学校に通っていた時、ガラス職人だった祖父が亡くなり、ひょんなことから兄と二人で祖父のガラス工房を継ぐことになる。

仲の良くなかった兄妹が、恋愛や失恋、仕事、身近な人の死などを通して新しい関係を築いていく。

人生いろいろあるけど、やっぱり「生きているっていいよね」と思わせてくれる小説。ちょっと泣けて、ほっこりする作品。

**リクエストにより購入**

### ●『ふたご』

**藤崎 彩織/著　文春文庫**

友だちのいない孤独な中学生、夏子は一学年上の月島に声を掛ける。友だちからいじめられ、裏切られ、傷つく夏子に月島は「お前の居場所は、俺が作るから。泣くな」と側にいてくれた。それ以来、奔放な月島に振り回されながらも、彼女は彼の側にいようとする。

自分のやりたいことが見つけられずに苦しむ月島。ピアノをやると決めて着実に大学へ進学する夏子。

バンド「ＳＥＫＡＩ　ＮＯ　ＯＷＡＲＩ」でピアノ、ライブ演出、作詞、作曲などを担当する著者の初小説。直木賞候補にもなった作品。

## ある日図書館で

**その１４　ＡＩ栄養士がヤバい**

作・絵：内山 裕子（司書）

## ●『はるか、ブレーメン』　重松 清/著　幻冬舎

主人公の小川遥香は高校二年生。彼女の母は、シングルで遥香を産み、３歳の遥香を実家に残して蒸発した。育ててくれた祖父母は５年前に祖父が亡くなり、祖母も亡くなって、遥香は一人ぼっちになった。

祖母の四十九日の法要が終わって家に帰ると、一通の速達が届いていた。差出人は「ブレーメン・ツアーズ」というオーダーメイドの個人旅行を扱う旅行会社。内容は、４０年前にここに住んでいた元住人が、かつての住まいをもう一度訪ねてみたいと希望しているとのこと。

元住民の老婦人を一週間家に泊めることになった遥香は、幼なじみのナンユウくんと「ブレーメン・ツアーズ」の活動を手伝うことになる。

老婦人には、息子に絶対言えなかった秘密があった。ナンユウくんの父にも早世した長男への秘めた思いがあった。そんな時、自分を捨てた母から「会いたい」と連絡が来る。

人は死ぬ時に何を思うのか。ちょっと不思議であったかい小説。

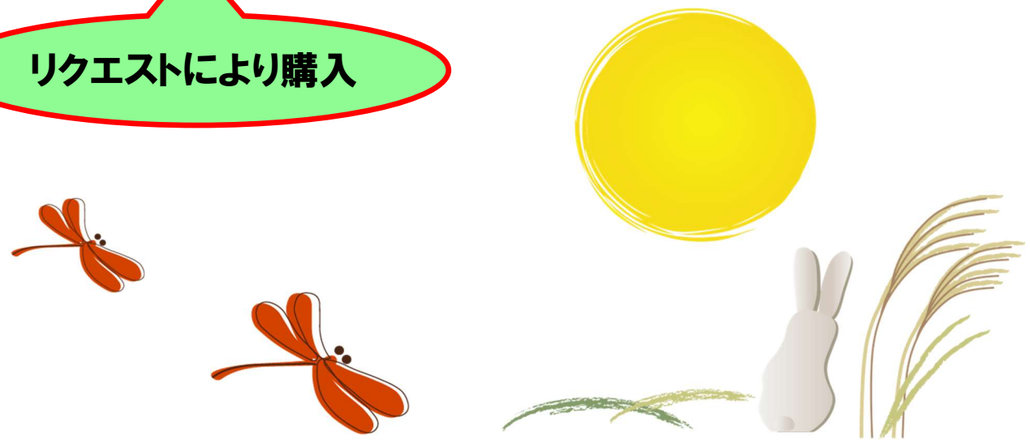
## ●『ゴミ拾いをすると、人生に魔法がかかるかも♪』
吉川 充秀/著　あさ出版

著者は８年間で 100 万個のゴミを拾い、「ゴミ拾い仙人」と呼ばれている。ただの物好きではない。国立大学を卒業後、スーパーマーケットに就職。24 歳で起業し、25 年間で年商 47 億円、経常利益４億円超を達成。直近では 13 期連続で増収増益。11 期連続で過去最高利益を更新中。26 歳で年収５千万円を超え長者番付に載った。日本全国から今まで 300 社以上の会社が会社見学に来たという。

そんな著者の経営上の目的は「従業員さんの幸福」だ。そこで、「経営の仕組み化」と「幸福の研究」を人生の二大テーマとして、18 年間で２億円を啓発本や国内外のセミナー参加費用に充ててきたという。その結果、習慣の重要性に気づき、「よい」と言われる習慣を片っ端からパクリまくった。そして、最終的にふるいの底に残った砂金のようなとっておきの習慣が「ゴミ拾い」だったのだ。

ゴミ拾いをすることで、物の見方や考え方がどのように変わったのか。どんな魔法がかかったのかを本書を読んで確認して欲しい。

**リクエストにより購入**



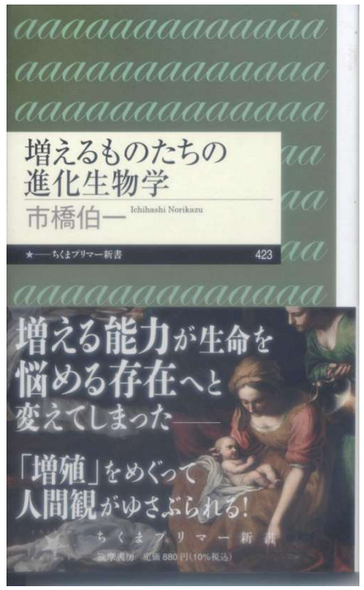
## ●『わたしの幸せな結婚』　顎木 あくみ/著　ＫＡＤＯＫＡＷＡ（富士見Ｌ文庫）

名家に生まれた美世は幼くして母を亡くし、継母と義母妹に虐げられて育った。

嫁入りを命じられた相手は、冷酷無慈悲と噂の若き軍人、清霞（きよか）だった。多数の婚約者候補たちが三日ともたずに逃げ出したという悪評の持ち主だ。切り捨てられるのを覚悟で久堂家の門を叩いた美世の前に現れたのは、色素の薄い美貌の男。初対面で辛く当られた美世だが実家に帰ることもできず、日々料理を作るうちに、少しずつ清霞と心を通わせていく。

いわゆるシンデレラストーリーである。実家で散々いじめられ、使用人のようにこき使われていた娘が婚約した相手は、家柄、財力、人柄、美貌、能力のすべてを兼ね備えた男で、しかも娘を心から愛してくれて、彼女を狙う悪の手から守ってくれるのだ。フィクションでなければ表現できない夢の世界だ。

どんな時代になっても、白馬の王子様を夢見る乙女心は不滅なのか、それとも厳しい現実の反動なのか…。



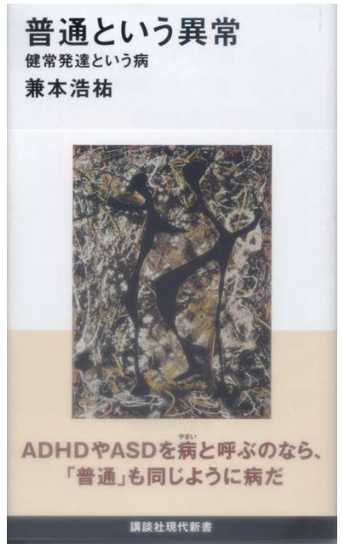

## ●『増えるものたちの進化生物学』
市橋 伯一/著　ちくまプリマー新書

この本は「なんで生きているんだろう」という疑問に答えるために書かれた。増えて遺伝する能力は生物を進化させ、繁栄をもたらし、やがて私たち人間に自由と生きる喜びを与えるとともに、尽きることのない不安や迷いを植え付けることになった。

「好きな異性が振り向いてくれない」「子どもができない」などの悩みは、私たちが、子どもを欲し、そのように行動してきた者たちの子孫だからであり、「時代遅れの本能」だと著者は言う。

祖先から受け継いだ本能に従うだけでなく、私たちは生き方を選択できる時代に生きている。後世に残せるのは遺伝子だけではない。

## ●『普通という異常　健常発達という病』
兼本 浩祐/著　講談社現代新書




ＡＳＤ（自閉スペクトラム症）やＡＤＨＤ（注意欠陥・多動性障害）の診断というのは、誰もが一定の割合で自分の中に持っている傾向性が大きいか小さいかの違いであって、たとえば尿管結石を診断したり、新型コロナの感染の有無を診断したりするのとは本質的に異なった「診断」なのだということを私たちはつい忘れがちだ。

いわゆる健常発達といわれる人々に見られる問題行動や過剰に適応した場合のしんどさ、健常ゆえの生きづらさなど、私たちが持っている【普通】という概念に疑問を投げかけている本。